HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	マックス・ブロートの『ユダヤの女たち』について
Author(s)	中村, 寿
Citation	独語独文学研究年報, 46, 35-54
Issue Date	2020-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77040
Type	departmental bulletin paper
File Information	46_02_nakamura.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

マックス・ブロートの『ユダヤの女たち』について

中村　寿

0.　はじめに

マックス・ブロート (1884〜1968) は、フランツ・カフカの紹介者・遺稿編集者として一般に知られる。彼は小説家・ジャーナリストであっただけではなく、チェコスロヴァキア共和国独立後は、そのユダヤ民族評議会の一員として、トマシュ・マサリクほか共和国の政治家との交流をもつなど、ユダヤ人の地位向上のために尽力した。ブロートは小説『ユダヤの女たち (Jüdinnen) 』[1] を通じて、ユダヤのナショナリズムを意識するようになったと言われる[2] 。ユダヤ人新聞『自衛――独立ユダヤ週刊新聞 (Selbstwehr－Unabhängige jüdische Wochenschrift 』(1907〜1938) [3] は、本作が出版されるとすぐに、本作に注目した。本作が投げかけた問題はカフカにも到達している。本稿では、本作に対する『自衛』による批判の要点を整理したのち、本作の全体把握を試みる。『自衛』は本作を「ユダヤの小説」としては不十分であると見なした。言い換えるなら、ユダヤの民族主義は本作に瑕疵を認めていた。本稿の目的は、この否定的な評価の理由を検討することである。

1.1　ドイツ系ユダヤ人のナショナリズム

『ユダヤの女たち』は、ユダヤ系メディアが当該著作に注目したことを通じて、カフカをはじめとする＜プラハのドイツ語文学＞作家たちに知られることになった。ユダヤ人新聞『自衛』では、作家としてのブロートの姿勢が問われていた。メディアが彼を批判する理由について触れておくことは、本作の内容を理解するうえでも有益である。『自衛』による本作についての書評を紹介するのに先立って、ユダヤ人新聞が彼を批判するにいたる経緯を確認しておきたい。

第一次世界大戦の戦前期はドイツ系ユダヤ人にとって、19 世紀の同化主義から 20 世紀のナショナリズムにいたる転換期としてとらえられる。18 世紀啓蒙主義の影響を受けて始まったリベラルなユダヤ主義は、ドイツ人とユダヤ人の対等な関係を構築するにあたって、ユダヤ人によるドイツ人の思考・行動様式への同化が必要であると説いた。しかし、19 世紀後半以降に

* 本論文は、科学研究費補助金 (若手研究、課題番号 18K12338、研究代表者: 中村　寿) の助成を受けている。

[1] Max Brod: Jüdinnen. Ein Roman (=Jüdinnen). München (Kurt Wolff Verlag) 1911. 『ユダヤの女たち』ほかからの引用については、原則として、本文中にドイツ語の原文を引用、訳文は脚注に入れる。

[2] Iris Bruce: Kafka and Cultural Zionism. Dates in Palestine. Madison (The University of Wisconsin Press) 2007.

[3] プラハで出版されていたドイツ語によるユダヤ人新聞。『自衛』は、ユダヤのナショナリズム (=シオニズム) の普及を目的として創刊された。第一次世界大戦期には、カフカ、ブロートをはじめとする＜プラハのドイツ語文学＞作家の多くが、その編集・出版に関与した。チェコスロヴァキア共和国独立 (1918 年 10 月) を経て、1922 年以降、『自衛』はそのサブタイトルとしてユダヤ民族新聞 (Jüdisches Volksblatt) 」を採用し、『自衛－ユダヤ民族新聞 (Selbstwehr－Jüdisches Volksblatt) 』は、同共和国ユダヤ民族政党の党機関誌となった。ミュンヘン会談とそれに続くナチスドイツによるズデーテン地方侵攻 (1938 年 10 月) 以降、『自衛』は廃刊となっている。

なると、ユダヤ人による世論の内部から、ドイツ人への同化を通じた対等関係の構築の可能性に疑義が呈せられてくる。同化主義の批判者からは、ユダヤ人をドイツ人と対等な「ユダヤのネイション」と見なそうとする視座が提起された。

同化主義は、ユダヤの同一性を定義づけるにあたって、宗教的帰属と文化的帰属を明確に区別した。同化主義では、ユダヤの同一性は、宗教的帰属によってのみ決定づけられる。そこで、彼らの理想は、ユダヤの宗教的帰属とドイツへの文化的帰属を両立させることに置かれる。一方で、シオニズムはユダヤの同一性を基礎づけるにあたって、ユダヤの宗教的帰属と文化的帰属を区別しなかった。それゆえに、ユダヤの民族主義者は、ユダヤの宗教・文化的帰属とドイツ近代文化は、融和不能であると考える。

一般的に、ナショナリズムは民族文化の構築を目標とする。シオニズムはその過程で、ユダヤの民族文学に着目した。ナショナリズムの視座からは、ドイツ語作家には、ドイツ語によるユダヤの民族文学の創造という作家の使命が要請される。『自衛』は、ユダヤ人をめぐる議論に無関心であるという理由を挙げて、ブロートを批判した。彼の無関心はナショナリズムに対するそれに言い換えられる。繰り返すが、シオニズムは作家の存在意義を、民族文学の創造に見出していた。ブロートは『ユダヤの女たち』というタイトルの通り、確かにユダヤ人を記述した。しかし、民族主義者は、彼らの期待と本作における登場人物との行動とのあいだに溝を認識していたにちがいない。

シオニズムはブロートに対して、ドイツ文化に浸った中流のユダヤ人ではなく、西欧近代文化とは一線を画す、新しいユダヤ人像の創造をせまったと言えよう。『自衛』による本作についての評論は、ブロートにとって、自身の民族性をめぐる議論への関与をうながすきっかけになったと評価される。

1.2　フーゴ・ヘルマンによる『ユダヤの女たち』に対する批判

1911 年 5 月、『自衛』はフーゴ・ヘルマン (Hugo Hermann) による本作についての評論を掲載した。書評にあたり、ヘルマンはラファエル (Raphael) とユーリウス (Julius) という二人の架空人物を設定した。ラファエルは弁護人として書評対象作を擁護する。ラファエルの弁護に対して、ユーリウスはその欠点を指摘する。書評は裁判記録のような体裁を取っている。

> Raphael. Hast du den Roman von Max Brod schon gelesen? Es ist noch nicht der jüdische Roman, noch immer nicht, aber es ist schon viel, doch schon ein jüdischer Roman. Du weißt, ich lechze nach dem jüdischen Roman. Dem Roman der Juden, worin ihre Vergangenheit stillschweigend steckt und woraus ihre Zukunft als Möglichkeit sich ergeben wird. Nun ist ein großer Schritt vorwärts getan. Kennst du das Buch schon?
>
> Julius. Ja, ich hab‘ es gelesen, zweimal sogar.[4]

[4] Hugo Hermann: „Jüdinnen“. Ein Roman von Max Brod. Ein Gespräch darüber von Hugo Hermann. In: Selbstwehr－Unabhängige jüdische Wochenschrift (=SW). 5 Jahrgang, 1911, Nr. 20 (19. Mai), S. 2f., hier S. 2. ラファエル: マックス・ブロートの小説を読んだか？あの小説は、未だユダヤの小説ではなく、依

「ユダヤの小説」は「ユダヤ人小説 (Judenromane) 」とも言い換えられる。その先駆として、ユーリウスは『ツィルンドルフのユダヤ人 (Die Juden von Zirndorf) 』、カール・シュピッテラー (Karl Spitteler) の『コンラート少尉 (Conrad der Leutnant) 』[5] を挙げた。『ユダヤの女たち』と『コンラート少尉』の対比からは、それぞれの主人公の対照的な生が導き出される。前者の主人公フーゴ・ローゼンタール (Hugo Rosenthal) の平凡な生に対して、少尉の悲劇的な死が強調される。

ユーリウスには本作の瑕疵を指摘する判事の役割が与えられていた。彼によれば、この小説の欠点は、ブロートが平均的で典型的な人物を描写したことにある。ユーリウスによる批判の背景には、ありきたりの人物についての描写からは、すぐれた物語は生まれないという認識があった。この批判に対して、ラファエルは、一般的な人物についての描写からもすぐれた創作は生まれうるという事実を挙げ、ブロートを擁護する。

> Brod wollte gewiß einen Schritt zu dem jüdischen Roman machen (sonst hätte er ihn doch auch nicht „Jüdinnen“ betitelt.) Wenn er nun die Juden darstellen will, und durch das Medium eines bestimmten Juden, so kann er ja eine so ganz besondere, eigentümliche, außerordentliche Persönlichkeit gar nicht brauchen.[6]

ラファエルは、ありふれた人物についての描写から普遍的な物語が創作されうる例として、『オイディプス王 („König Oedipus“) 』を挙げる。ユーリウスがラファエルの説得を受け入れることを通じて、二人のあいだには、「ユダヤの小説」として妥当するためには、必ずしも傑出した主人公は必要ないという合意が形成される。

それにもかかわらず、二人は『ユダヤの女たち』について「ユダヤの小説」としては不適切であるという結論を導いている。その根拠として、ユーリウスは主人公による判断の曖昧さを指摘する。

> Selbst wenn Brods Buch eine vollkommene Darstellung wäre, könnte es eben als Darstellung nie der jüdische Roman sein. Denn es widerspricht dem Wesen eines solchen im höchsten Sinne historischen

---

然としてそうではないが、かなりの点においてすでに、一つのユダヤの小説ではある。君は知っているかもしれないが、ぼくはユダヤ人小説を渇望している。ユダヤ人の過去が無言のままに潜んでいて、彼らの未来が可能性としてそこから現れてくるようなユダヤ人小説を。たった今、前進への偉大な一歩が踏み出された。君はこの書物の名前を知っているか？
ユーリウス: ああ。読んださ、しかも二回。

[5] Ebd.

[6] Ebd. ブロートは確かにユダヤの小説への一歩を踏み出そうとした(そうでなければ、彼はこの小説をそもそも『ユダヤの女たち』と題さなかったであろう) 。さて、彼がユダヤ人を描写しようとするなら、ある特定のユダヤ人という媒体を使ってそうしようとするなら、彼にとって、特別に風変わりで、例外的な個人はまったく役に立たない。

Werkes, die Erscheing des Judentums, diese so komplizierte, vielfältige, widerspruchsvolle Erscheinung vom Standpunkt nur einer Individualität aus zu betrachten. Es wäre die Aufgabe dieses historischen Werkes, zu urteilen; die Urteile schon dieses unbedeutenden, kindischen Hugo Rosenthal aber sind so anfechtbar und unsicher, daß man immer das entgegengesezte, gewiß aber ein ganz anderes Urteil wird verteidigen können. Denn wir kennen ja alle diese Menschen, über die Hugo urteilt: das ist ja Brods ungemeine Kunst, die Menschen unseres täglichen Umganges mitsamt ihrer ganzen Atmosphäre in die Form der Erzählung zu bringen; und darum sind wir autorisiert, auch jedes andere Urteil über sie zu fällen, als Hugo, und tun das auch.[7]

ブロートの描写がドイツ系ユダヤ人とその雰囲気の再現に完璧なまでに成功しているという点において異論はない。それにもかかわらず、『ユダヤの女たち』は、シオニストが理想として掲げる「ユダヤの小説」とは一致していない。この不一致から認められるのは、ドイツ系ユダヤ人に対して、ブロートとシオニストが異なる評価をしていたことである。

ヘルマンはブロートの筆致を「ニュアンスへの崇拝 (Kultus der Nüance) 」[8] とまとめた。ブロートは流行への敏感さを通じて、温泉保養地に集まるユダヤ人の諸相を再現することに成功した。しかし、それに対する微に入り細を穿った説明のために、登場人物のほぼ全員が共有しているはずのユダヤの同一性に関する話題は、素通りされてしまっている。『自衛』の批判は、ブロートがユダヤ人を題材にしていても、彼らに呈される諸問題に対して、応答をしていないという点に向かっていた。

Scheint es dir nicht, daß das zu einer ganzen sophistischen Weltauffassung führen muß, wo nicht einmal mehr der Mensch das Maß aller Dinge ist, sondern es überhaupt kein Maß mehr für irgendein Ding gibt? Diese Vernichtung des Urteils ist doch eine große Gefahr; und sie ist für Brod, auch in seinen früheren Werken, charakteristisch. Während alle jüdischen Dichter der älteren Zeit immer einen festen unverlierbaren Untergrund unter <al...> ihren Gesichten fühlten und ihnen, so scheint es mir, alle Mystik nur dazu dienen sollte, diesen tiefen Urgrund zu stärken und zu festigen, kennt Brod nur die Erscheinung und gibt jede Sicherheit preis; ja ich glaube, er gibt sich so ganz an all das Mystische und Rätselvolle der

---

[7] Ebd., S. 3. ブロートの書物が完璧な描写であるとしても、描写としてそれはユダヤの小説になりえていない。なぜなら、ユダヤ主義という現象、このあまりにも複雑かつ多様で矛盾に満ちた現象を、一個人としての立場から観察することは、最高の意味での、この歴史的産物の本質に抵触するからである。判断することが、この歴史的産物の使命であろう。この平凡な、子供じみたフーゴ・ローゼンタールの判断には、議論の余地があるだけでなく、不安定さがある。それゆえに、絶えず反論が提起されるが、まったく別の判断が擁護されることもある。それどころか、ぼくらはフーゴが判断する人々についてくまなく知っている。ブロートの並外れた技芸とはこういうことだ。それは、ぼくらが日常的に交際している人々を、その雰囲気をひっくるめて、物語という形式に落とし込むことだ。だから、ぼくらには、ぼくらの知っている人々について、フーゴとは悉く異なる判断をくだす資格が与えられているし、実際ぼくらはそうしている。

[8] Ebd.

Welt hin, um noch der letzten Erinnerung an den festen Grund, die von früher her in ihm lebt, gänzlich zu entschlüpfen.[9]

最終的に、ヘルマンはブロートの姿勢を作家としてのそれではないと批判した。ヘルマンによれば、作家は定まった視点から世界を記述しなければならない。しかし、ブロートには安定した視座が欠けている。ブロートは世界を記述する代わりに、それをながめる自分自身の視点しか描写していない。

Nicht mehr empfinde ich die Dichtung als eine Nachahmung der Natur; der Dichter muß etwas hinzutun, der Dichter soll auf einem sicheren Grunde stehen und muß diese verworrene Melodie deuten. Der Dichtung Schleier empfängt er aus der Hand der Wahrheit. Und weil Brod nicht die Wahrheit sagen will, sondern nur seine Aspekte der Welt, halte ich ihn für keinen Dichter.[10]

その一週間後、ブロートはこの評論に対する「一つの返答 (eine Erwiderung von Max Brod) 」[11] として、作家の使命について自らの見解を発表した。その媒体となったのは、ヘルマンの書評同様、『自衛』である。ブロートは以下のような書き出しで、作家としての自身の姿勢を正当化しようとする。

In der Kritik, die die „Selbstwehr" über mein letztes Buch veröffentlicht hat, findet sich die geschleuderte Schlußbemerkung, daß ich „kein Dichter" bin, weil ich nicht die Wahrheit sagen will, sondern nur meine Aspekte der Welt, weil ich die „verworrene Melodie der Welt" nicht deute, nicht Urteile über sie abgebe, sondern sie einfach darstellte. ― So primitive Irrümer wie der vorliegende verdienen nun nichts

---

[9] Ebd. それ (＝ブロートの判断) からは、このうえなく洗練された世界観がつくられる。その世界では、人間はもはや万物の尺度ですらないだけでなく、いかなる事物に対する尺度もまた、もはやなくなってしまっている。君にはそんなふうに見えないか？判断の根絶には大いなる危険が潜んでいる。それがブロートの、彼の初期作品にとっての特徴なのだ。比較的古い時代のユダヤの作家たちはみな、彼らの幻視のすべてのもとに、いつも、強固とした、決して失われることのない基盤の存在を感じていた。ぼくにはこんなふうに見えているのだが、幻視に対して、あらゆる神秘主義がこの深淵なる原基盤を補強し、強固にするために、役立つことになっていた。それに対して、ブロートは外観しか知らない。彼はありとあらゆる確実性を放棄している。ぼくの見立てによると、彼は、神秘的なものと謎めいたもののすべてを手がかりにして、世界に没入している。その結果、もともと彼の体内で生きていた、強固な基盤についての最後の記憶が、すっかり抜け落ちてしまっている。 (括弧) 内筆者加筆。 <括弧> 内は印刷不明瞭のため、解読できなかった。

[10] Ebd. ぼくはもはや文芸を、自然の一つの模写としては受け取らない。詩人は何かを置かなければならない。詩人は一つの確固とした基盤のうえに立ち、このもつれあった旋律を解釈しなければならない。作家は真実という手から詩のヴェールを受ける。ブロートは真実ではなく、世界に対する自分自身の視点しか告げようとしていない。それゆえに、ぼくは彼を詩人とは見なさない。

[11] Max Brod: Mein Roman „Jüdinnen". Eine Erwiderung von Max Brod. In: SW. 5, 1911, Nr. 21 (26. Mai), S. 1.

Besseres, als durch ein ganz primitives Exempel widerlegt zu werden.[12]

作家は「世界についてのもつれ合った旋律」を解釈しなければならないと考える点において、ヘルマンとブロートは一致している。それについて描写するためのブロートの手法はこうである。作中で起きる同一の事件に際して、複数の登場人物は異なった判断をくだす。それだけでなく、彼らは時間の経過ののち、判断を覆すこともある。作家の使命は登場人物の判断とその経過を記述することである。作家が登場人物を媒体として、作中でのできごとに際して、自身の見解を述べることは、その仕事の限界を超えている。ブロートはフロベールの手紙を引用しながら、自らの姿勢をこう述べた。

„Ich finde, ein Romanschriftsteller hat nicht das Recht, seine Meinung auszusprechen. Hat sie der liebe Gott je gesagt, seine Meinung?“[13]

『自衛』はブロートの反論と同時に、ヘルマンによる再反論を掲載した。そのなかでヘルマンは、作家が作中でのできごとに対して自らの見解・解釈を述べることは、作家の仕事ではないというブロートの意見に同意している。その一方で、ヘルマンは、傑作はこの限りではないと述べる。偉大な作家は登場人物の判断しか記述していなくても、その作品には、おのずからその見解が反映される。つまり、傑作の読者は、登場人物の判断を通じて、作家の解釈に近づくことができる。

Wie immer dem sei, der Dichter soll deuten, dabei bleibe ich, wenn auch nicht demonstrieren; aber eher mag er noch Didaktiker sein, als Indifferentist. Denn dieser will alles sehen, und es genügt ihm nicht, die Augen aufzutun, er muß sie aufreißen; er will die Dinge von allen Seiten sehen, und so mißlingt das Kunstwerk. Der Dichter betrachtet seinen Gegenstand von einer, von seiner Seite, und dringt von da her in ihn ein bis zum Zentrum; das kann eine Deutung bringen, nicht aber, daß man mit angestrengt aufgesperrten Sinnen um den Gegenstand herumgeht und ihn beschaut, beriecht, betastet. Hier, wenn irgendwo, ist weniger mehr. Und so, weil er nicht die Wahrheit, und wäre es nur seine Wahrheit, sagen will, sondern nur seine unzähligen Aspekte der Welt, halte ich Max Brod für keinen großen Dichter;[14]

---

[12] Ebd. 『自衛』はわたしの最新刊についての評論を掲載しました。そこでは、行き過ぎの結論が表明されています。それによると、わたしは「詩人」ではない。その理由はこうです。わたしは真実ではなく、世界に対するわたし自身の視点しか告げようとしていない。つまり、わたしは「世界についてのもつれ合った旋律」を解釈していないだけでなく、世界について判断することを放棄し、それらを単に描写しているにすぎない。ここで提示されているような稚拙な誤りを論駁するのに、まったく稚拙な例を引き合いに出すことほど、ふさわしいことはありません。

[13] Ebd. 「小説家には自身の見解を表明する権利はない、とわたしは思います。それを神様がこれまでに述べたことが、かつてあったでしょうか、神様ご自身の見解を？」

[14] Hugo Hermann: Nachbemerkung. Von Hugo Herrman. In: SW. 5, 1911, Nr. 21 (26. Mai), S. 1f., hier S. 2. 対象がどんなものであろうとも、詩人は解釈をするべきです。わたし自身は実演することはしません

『ユダヤの女たち』をめぐるシオニストと原作者のあいだの論争を締めるにあたって、ヘルマンの言及した「無関心主義者」に注目したい。ここに『ユダヤの女たち』発表当時のブロートの立場が集約されている。シオニストから見れば、ナショナリズムが民族文学の創出を求めているにもかかわらず、ブロートはそれに応じようとはしていない。彼はユダヤ人の群像を記述した一方で、彼らが共有しているはずの同一性をめぐる問題には立ち入らなかった。その代わりに、彼は市民生活についての美的描写にいわば引きこもっていた。

ブロートは典型的なユダヤ人青年フーゴを主人公に仕立て、その視点から、ブルジョワの生活を描写した。彼はそれをきわめて正確に再現した。しかし、彼が提示した世界は、ナショナリズムの要請には一致していなかった。

『ユダヤの女たち』をめぐる論争は、『自衛』の仲介を通じて、＜プラハのドイツ語文学＞にも痕跡を残している。この論争はカフカにとっても、「ユダヤの小説」に取り組むきっかけとなった。

1.3. 『ユダヤの女たち』に対するカフカのコメント

ヘルマンとブロートによる論争が『自衛』に掲載されたのは、1911 年 5 月 19 日、および、その一週間後の 26 日である。その二ヶ月前、カフカは本作に対する自らの所感を日記に記していた[15] 。1911 年 3 月 26 日の記述は、シオニストの用いる「ユダヤの小説」の参照内容を理解するにあたって、大きな助けとなる。また、この記述は、この当時からカフカがシオニズムをめぐる議論の冷静な観察者であったことをよく伝えている。

> 現在われわれは、西欧の小説がユダヤ人のなんらかのグループを扱おうとし始めるや否や、たちまちユダヤ人問題の解決策までもその小説の筋以下か以上に求めたり見いだしたりす

が、この点にこだわろうと思います。しかし、彼 (=ブロート) は無関心主義者というよりはむしろ、教授法学者であるようです。この無関心主義者はあらゆるものを見ようとしますが、両眼を開けるだけでは、彼は満足していません。彼は驚いて眼をみはることをよぎなくされ、ものごとをありとあらゆる側面から見ようとします。その結果、芸術作品は失敗しています。詩人は、対象をある側面、つまり、自分自身の面から観察しているにすぎません。対象はそこから彼の中枢に到達します。それは一つの解釈をもたらすのかもしれませんが、それでは、集中して感覚を解放し、対象に近づき、それを見て、その臭いを嗅ぎ、それに触れることはできません。この点では、それがどこか別の箇所であっても、より少ないことはより良い、ということになります。彼は真実を告げようとはしていません。彼が告げようとしているのは、彼の真実に過ぎません。彼は世界についての無数の側面しか語っていません。それゆえに、わたしにはマックス・ブロートが偉大な詩人であるとは思えません。 (括弧) 内筆者加筆。

[15] カフカは『自衛』の書評に先立って『ユダヤの女たち』について言及していた。このことからは、他媒体が『自衛』に先駆けて、フーゴ・ヘルマンとブロートによる論争を掲載していたのではないかという可能性も捨てきれなくなる。あるいは、カフカが『自衛』誌上での論争の存在をまったく知らないまま、本作についての記述を残したとするなら、彼は、ユダヤのナショナリズムが俎上に載せた問題について、その若き日から、相当に精通していたということが指摘できる。

る癖がある、と言っても過言ではない。『ユダヤ女たち』のなかでは、しかしそういう解決は示されていない。いや、想像されてさえいない。というのは、こういう問題に熱心にとり組んでいる例の人たちが、この小説においては中心から遠く離れたところに立っているからである[16]。

『ユダヤの女たち』の登場人物はそのほとんどがユダヤ人であった。シオニストは小説から彼らが抱えている問題に対する解決策を見出そうとしている。しかし、登場人物たちはこうした問題には関心がない。

しかしこの欠点はもう一つの欠点から生じたものなのだ。『ユダヤ女たち』には非ユダヤ的な観客たちが欠如しているのである。この声望ある対立的な人々は、他の小説ではユダヤ的なものを誘い出す。そこでそのユダヤ的なものは彼らに押し迫って、彼らを驚愕、懐疑、嫉妬、恐怖に落し入れるが、とどのつまりは彼らの自信と化してしまうのだ。しかしそれはともかく、ユダヤ的なものは彼らに対してこそ精一杯背伸びすることができるのである。このことこそわれわれが要求していることであり、ユダヤ的素材を分解するこれ以外の方法を、われわれは是認しない[17]。

『ユダヤの女たち』の登場人物の大多数がユダヤ人であることに、シオニストはそれが「ユダヤの小説」になりうる可能性を認めていた。逆説的なことに、カフカはその弱点を、ユダヤ人を登場させればさせるほど、その要素が薄まってしまう点に見出している。彼らにとっての迫害者が不在ならば、彼らに解放者は必要なくなる。救済者の偉業は、異端審問官のような虐待者が登場しなければ、描かれえないのだ。

事実イタリアの歩道を歩いていて、トカゲが足元でびっくりして跳ね上がるのを見て非常に喜ぶことがある。われわれは何度でも身をかがめて見たいと思うが、どこかの店で彼らが何百匹も、よく酢漬け胡瓜が入れてある大きなびんのなかで絡みあって這い回っているのを見ると、われわれはどうしていいか分からなくなる[18]。

上のトカゲはユダヤ人あるいはシオニストの謂だという指摘がある[19]。実際、ブロートはほとんどユダヤ人からなる社会を描写した。シオニストもまた、「ユダヤの国家」の建設を通じて、彼らが圧倒的多数になる場所を約束しようとしている。カフカは、それが実現するにして

---

[16] Franz Kafka: Tagebücher. Kritische Ausgabe. Hrsg. von Hans-Gerd Koch, Michael Müller und Malcolm Pasley. Frankfurt am Main. (S. Fischer) 1990, S. 159f. 日本語訳については、新潮社版『決定版カフカ全集 7――日記』1992 年、谷口茂　訳を使用している。筆者は „Jüdinnen“ の訳語を『ユダヤの女たち』としたが、カフカからの引用箇所については、谷口に倣い、『ユダヤ女たち』とした。
[17] Ebd., S. 160.
[18] Ebd., S. 161.
[19] Iris Bruce: a. a. O., 2007, S. 32.

も、ユダヤ人は当惑せざるをえないと書いた。この所見はカフカの立ち位置をはっきり伝えている。彼はこの当時から晩年にいたるまで、シオニズムの実践者ではなく、その冷静な観察者であった。

> 『ユダヤ女たち』は、いつもこの著者の小説のなかで活躍する青年たち、あの、さまざまの最上のものを奪い取って、それらを見事な放射線を描いてユダヤ人社会の境界まで導いて行く第一線の青年を登場させないで済ましている。しかし小説にこういう青年がいなくても困らないということこそ、どうしてもわれわれの腑に落ちないことなのだ。この点において、われわれは欠点を見いだすというより、むしろ感じている[20] 。

すでに確認した通り、小説の主人公フーゴは凡庸な青年であった。ブロートはその視点から、温泉保養地に滞在するブルジョワの社交界を記述した。それを再現する彼の筆致は、きわめて高く評価されていた。

小説をめぐる『自衛』における論争、それに対するカフカの所見からは、シオニストの要請が明るみに出される。中流生活はユダヤの民族文学にとってふさわしい題材ではなかった。では、なぜ社交界の描写はナショナリズムの要求に一致しなかったのだろうか。

2. 小説の展開

主人公のフーゴ・ローゼンタールは 17 歳、プラハにある実科ギムナジウム (Realgymnasium) に通う発明家志望の学生である。学期中の彼はプラハに下宿しているが、夏休みのあいだ、テプリッツ (Teplitz) に帰郷する。彼は父と兄をすでに亡くしているため、家族は母のみである。父の死後、母は自身の両親から相続したテプリッツの館に移住した。したがって、フーゴにとって、テプリッツは学期休みの帰省先ではあっても、生まれ故郷ではない。

休暇前、彼は物理の試験に落第した。休暇後、彼は再試験を受けなければならないのだが、母のルーツィエ夫人 (Frau Lucie Rosenthal) にはその事実を打ち明けられずにいる。作中には、彼が帰省した日付についての言及はない。それに対して、彼がプラハに戻る日付について、9 月 1 日と明記されている。それゆえに、小説での記述の対象は、17 歳の彼がテプリッツで過ごした一夏の経験ということになる。

『ユダヤの女たち』という表題は、主に、彼がテプリッツで出会う女たちに由来すると考える。彼女たちのうち、優先的に名前を挙げなければならないのは、イレーネ・ポッパー (Irene Popper) である。間もなく 27 歳になろうとしている彼女はプラハの出身で、婚約破棄を経て、休養のためにテプリッツに滞在していた。彼にとってイレーネは好意と崇拝の対象である。彼女は若く未熟な彼を受け入れるような態度を取りつつも、最終的には拒絶する。

彼女に対置されるべき存在が、彼の幼馴染のオルガ・グロースリヒト (Olga Großlicht) である。オルガはフーゴと同じコリーン (Kolin) の出身だった。彼女もまた彼同様、夏を、彼の母

[20] Kafka: a. a. O., S. 161.

の館で過ごすことが習慣になっていた。イレーネからの拒否によって心に傷を負ったフーゴは、その癒しをオルガに求める。前者がフーゴにとって愛憎の対象になるのに対して、後者は癒しの役割を演じる。

イレーネは多数の親戚とその知人たちとともにマナーハウス (Herrenhaus) に滞在していた。登場人物はこの施設で、日光浴、温泉水入浴、社交をして過ごす。マナーハウスはサナトリウムに似た施設であるという印象を受ける。

フーゴは帰郷すると、その翌日からそこに宿泊中のイレーネへの訪問を開始した。記述の大部はフーゴによるマナーハウス訪問と、その際の彼の心理描写によって占められている。彼女に対する愛情と崇拝はマナーハウスでの彼女との議論を通じて、醒めていく。

ところで、イレーネへの熱狂が怒りに変わっていく過程では、ユダヤの女たちだけではなく、男たちにも重要な役割が担わされている。イレーネの社交仲間として多数の男たちが登場する。小説の展開を追うためにここで、寡夫のヌスバウム (Nußbaum) 、眼科医 (Augenarzt) のタウベリス博士 (Dr. Taubelis) 、ヌスバウムの友人のロシア人、ピトロフ (Pitroff) を挙げておく。イレーネに対するフーゴの愛情が倦怠を経て、憎しみに変わるきっかけは、ヌスバウムにあった。

フーゴがプラハに発つ二日前の 8 月 30 日、ヌスバウムは自身とピトロフを講演者として、住民集会 (Volksversammlung) を開催した。講演者席に座る際、前者はイレーネを、後者は彼女の従妹カミラ・カッパー (Kamilla Kapper) を連れていた。イレーネの弟アルフレート・ポッパー (Alfred Popper) は集会に闖入し、その妨害を試みる。集会参加者と妨害者による乱闘騒ぎのなか、現場にいたフーゴはイレーネを救出しようとした。しかし、ヌスバウムが彼女に近づこうとするフーゴの前に立ち塞がる。彼女はフーゴを認めても、一顧だにしない。彼はイレーネの仕打ちを侮辱として受け取った。その夜、集会からの帰途、彼は自身の非力さに対する絶望から自殺を試みる。

翌日、フーゴとオルガはマナーハウスの人々とピクニックに出かけた。目的地のアイヒヴァルト (Eichwald) でイレーネとオルガは口論になる。その際、彼はオルガに加勢するべきだと感じたが、それをしなかった。彼はオルガに対して良心の呵責を覚え、イレーネに対して、オルガとの友情を優先することに決める。その翌日、彼は母、オルガ、イレーネ、タウベリスに見送られ、プラハに戻る。

本編にはエピローグとして、プラハに到着したのちのフーゴに起きたできごとが付されている。二週間後、彼は再試験に通過した。彼はプラハの街角でアルフレートと再会する。アルフレートを通じて彼にはイレーネとタウベリスの婚約が伝えられる。同時に読者に、イレーネに寄せる彼の想いには、報いがなかったわけではないということが明かされる。アルフレートは彼に、イレーネがタウベリスに対するのと同じくらい、彼に好意を寄せていたということを伝えた。

フーゴはアルフレートの案内でポッパー邸に向かう。ポッパー邸で、彼はイレーネとその両親、アルフレート、タウベリスとともに昼食を摂る。夕方、ポッパー邸を辞去した彼はグラーベン (der Graben) を通り、下宿に戻る。彼はベッドに横になると、すぐに深い眠りに落ちる。彼にはこんな言葉が聞こえてくる。

Und nun schlafe nur, mein Junge, kleiner Hugo. Gute Nacht, mein Liebling. Ruhe dich aus, recht so, und werde erst reif und kräftig, wachse noch ein bißchen, ehe du dich in das Leben wagst. Bleibe noch eine Weile ein Kind, das ist mein Rat... Die Erfindungen lasse und lerne lieber tüchtig deine Physik. Die Mädchen lasse, werde erst älter, dann entgehen sie dir nicht. Das alles, was du bisher unternommen hast, war ja vorzeitig. Praematurus, nach deiner eigenen Ansicht; Seitensprünge. Man darf eben nicht die Frucht vor der Blüte wollen, das ist ein Gesetz in der Welt, daran wirst du dich gewöhnen müssen, mein stürmischer Freund! Aber deshalb brauchst du nicht gleich zu verzweifeln, Gott bewahre! Zuerst lerne, dann erfinde. Zuerst schau dich einmal ordentlich um, nimm dir Zeit dazu, und dann wirst du das richtige Mädchen schon erkennen, die richtige große bestrahlende Liebe, die dich glücklich machen wird... Alles in allem: ich denke doch, es wird etwas Ganzes und Ordentliches aus dir werden, kleiner lieber Kerl. Und wenn auch nicht gerade Minister in deinem Vorzimmer warten werden, wie du einmal geprahlt hast: daß du etwas Beachtenswertes und Nützliches leisten wirst, davon bin ich fast ganz sicher überzeugt. Jedenfalls sollst du davon überzeugt sein. Strebe nur, kämpfe, wie dein edles heißes Herz es verlangt, vorwärts! Und jetzt, zum Schluß noch eins: Glück auf![21]

フーゴの関心は女性と学問にあった。語り手ブロートはイレーネに対する彼の憧れを意識し、上の言葉を投げかけている。技術系の高等学校に通う 17 歳の青年は、十歳年上の女性に恋をした。青年には恋愛の経験がほとんどない。それに対して、年上の女性には、弁護士のハインリヒ・ヴィンターニッツ (Heinrich Winternitz) という男から婚約を破棄されたという経験がある。世界に対するフーゴの経験不足は、彼の若さに求められていた。女性と学問は、経験の蓄積を通じて、達成されうる。ブロートはフーゴを通じて、ユダヤ人青年に励ましの言葉を贈ったと解釈できる。

---

[21] Brod: Jüdinnen, S. 337f. 若者よ、小さなフーゴよ、さあ眠るんだ。お休み。じっくりと休養を取り、経験を積んだ力強い人間におなりよ。君が君の人生に踏み出すまで、もう少し成長しなよ。それまで、もう少し子供のままでいいよ、これがぼくからの忠告さ…発明はそのままにしておいて、それよりもせっせと物理学を学びなよ。女の子はそのままにしておいて、まずは年をとりなよ、そうすれば、彼女たちが君から去っていくことはない。君がこれまでに試みてきたことのすべては、早すぎたんだ。時期尚早、君自身の見解にしたがうなら、寄り道だと言えるのかもしれない。花が咲くより前に果実を欲してはいけない、これが世界の法則さ。君はもうじきそれに慣れるさ、ぼくの情熱家の友人よ！しかし、そうだからといって、すぐに絶望する必要はないさ、絶望なんてことがあってたまるか！まず勉強、それから発明。そうして眼を見開いて、周囲を見回してごらん、じっくりと。そのとき、君の眼の前には、君にふわさしい女の子がいるはずさ。君にふさわしい、まぶしい愛が。君を幸福へと導く愛が…要約しよう。ぼくはこう考えている。君は欠点のない、ちゃんとしたものをきっと成し遂げる、小さな愛すべき若者よ。かつての君が不遜にも語ったように、君の前の控えの間で大臣が待っているというふうにはならなくても、君は、注目に値するだけでなく、有益な業績を残すことになる。ぼくが確かにそれを請け負うさ。君もそうなると確信していなければいけないよ。頑張れ、そして、闘え、君の気高く熱い心が望むかぎり！前へ進め！そして、最後にもう一言。健闘を祈る！

ヘルマンによる書評では、主人公の平凡さが問題視されていた。この凡庸さは、主人公の若さを肯定するブロートの姿勢を通じて、いっそう際立たされる。ブロートは主人公のいたらなさを擁護することを通じて、『ユダヤの女たち』を青春小説にした。ヘルマンら批判者は、人間の不完全さを寛容するブロートの姿勢に、通俗性を認めていたにちがいない。

3. ビーダーマイヤーのユダヤ人

ブロートは本作を通じて、中流階級のユダヤ人の生活を描いた。カフカの指摘通り、本作には、ユダヤ人ではない人物はほぼ登場しない。それだけでなく、登場人物の多くは縁戚関係にある。したがって、記述されるのは、きわめて閉じられた世界である。フーゴがイレーネに初めて出会う場面では、このような会話が交わされる。

„Vielleicht sind wir am Ende auch noch verwandt? Wissen Sie, so: unsere Kuh hat auf eurer Wiese geweidet...Wenn zwei Juden einander treffen, so sind sie doch bekanntlich nach zehn Minuten schon miteinander verwandt.“ Und sie begann die Art solcher Gespräche nachzuahmen: „Also meine Mutter ist eine geborene Bondy...“

„Ist nicht vielleicht... Sie heißen doch Rosenthal － der Rosenthal in Laun, was das große Hopfengeschäft hat, Ihr Herr Bruder...“ wurde die Mutter sofort eifrig, wie von diesem Ton ins Innerste getroffen.

„Mein Bruder ist schon lange tot...“[22]

上の引用からは、兄の存命中、フーゴの暮らし向きはきわめてよかったということが想像できる。建築についての描写を通じて、本作で描かれる世界は、19 世紀オーストリアの流行の延長線上にあるということが指摘される。

Sie gingen zum Claryschen Schloß, in den Schloßgarten. Sie sahen die Schwäne auf den Teichen dahinziehen über ihren Spiegelbildern, die Bäume rauschend alle Äste ihnen nachstrecken. Irene bewunderte das Aristokratische der Anlage...In der Meierei hatte sie die Schönheit weißgekalkter, epheubedeckter Wände entdeckt... Sie stand vor der schwungvollen Dreifaltigkeitssäule, deren Ähnlichkeit mit Prager Bauten sie fühlte, noch ehe sie den Namen des Baumeisters Mathias Braun erfahren hatte. Und der Biedermeierstil des alten Stadtbades, mit den einfachen Säulen, entzückte sie...

---

[22] Ebd., S. 20. 「わたくしたちも最後には親戚同士になっているのかもしれませんわね、こんなお話をご存知かしら、手前どもの雌牛があなた様の牧草地で草を食んでいた…二人のユダヤ人が出会えば、周知のごとく、十分後には親戚同士になっているという成り行きですわ」彼女はこういった体の会話の真似をしながら言った。「それはそうと、わたくしの母の旧姓はボンディと言いますの…」「あなた様はローゼンタール、ラウンのローゼンタール様とおっしゃるのではありませんか？ホップの商いを派手にやっていらっしゃる…兄上様は…」言いかけるとすぐに母は興奮した、まるで心底からその場にふさわしい発言をしたかのように。「ぼくの兄はずっと前に亡くなりました…」

Hugo wunderte sich darüber, wie sie, die Zugereiste, ihm, dem alten Bürger, Teplitz zeigte und erklärte. Zugleich fand er eine gewisse Unlogik darin, daß sie weiterhin auf die Teplitzer herabsah, während die Stadt, von ihnen erbaut und eingerichtet, ihr so zusagte... Diesen Einwand verstand sie nicht...[23]

フーゴはイレーネの態度に腹立ちを隠せないでいる。彼女はプラハとテプリッツを対照することを通じて、地方都市を過小評価した。彼女とその親族は首都の社交界に出入りすることのできる数少ないユダヤ人である。彼女たちは避暑のために地方都市に滞在中であった。保養客に近づいてくる地方都市出身の人物として設定されているのが、ヌスバウムである。

イレーネはフーゴにヌスバウムを以下のように紹介した。それを読むと、彼はイレーネよりもずっと年長であることが分かる。彼の立ち位置はきわめて興味深い。彼はユダヤの伝統と近代の境界線上に立っている。

Herr Nußbaum ist eigentlich Teplitzer, aber nach einer romantischen Jugend hat er irgendwo, in Chemnitz, mir scheint, eine Christin geheiratet, ist auch selbst konfessionslos geworden. Kurz seine hiesigen Angehörigen, Der Vater, die Brüder, die hier als die orthodoxeste Familie bekannt sind, haben ihn verstoßen. Er existiert nicht für sie. Anfangs schien ihn das nicht zu kümmern. Nun ist er aber alt geworden, auch Geld scheint er genug zu haben, er lebt als Privatier, die Frau ist ihm gestorben, und so suchte er wieder Anknüpfungen an die Blutsverwandten. Es muß da etwas Schreckliches vorgefallen sein, ich weiß das nicht genau. Man hat ihn vielleicht hinausgeworfen, geohrfeigt... Sie kennen doch diese alten Israeliten, die sich die Kleider zerreißen wie bei einem Begräbnis, wenn sich ihr Sohn taufen läßt. Neulich hat sich wieder so ein steinalter Rabbiner durchs Fenster geworfen, als man ihm die Nachricht brachte...[24]

---

[23] Ebd., S. 72. 彼ら (=フーゴとイレーネ) はクラーリー城へ、その庭園に向かった。彼らは、池の白鳥がその影のうえを進んでいくのを、樹々がざわざわと音を立てながら、枝のことごとくを、彼らのほうへ広げているのを観察した。イレーネは庭園の貴族趣味を褒めた。彼女はこの荘園で、蔦に覆われた白漆喰の壁に美しさを見出した。彼女は、躍動感ある三位一体像の前で立ち止まり、プラハのそれとの類似性を感じていた。このときまで、彼女は建築家マティアス・ブラウンの名前を知らなかった。彼女は、簡素な飾り柱の取りつけられた古い市営浴場のビーダーマイヤー様式に魅入った…フーゴは驚きを隠しえなかった。なぜなら、よそ者であるはずの彼女が、テプリッツの古い市民である彼に、この街を案内し、解説をしていたからである。
それと同時に、彼はある種の不条理さを感じた。彼女はテプリッツ市民をこれまでと同様に見下していた。その市民によって建てられ、整備されたこの街は、彼女のお気に入りであったはずなのに…彼女はフーゴの抗議に耳を貸そうとはしなかった…(括弧) 内筆者加筆。マティアス・ブラウンの名前表記について、Matthias の綴りが一般的であるが、ブロートは Mathias を採用している。

[24] Ebd., S. 58f. ヌスバウム氏のご出身はテプリッツです。でも、あの方はロマンティックな青年期を過ごしたのち、ケムニッツかどこかだったとわたくしは思いますけれども、キリスト教徒の娘と結婚し、信仰を放棄しました。そのあとすぐ、ここで最も正統主義的な一族として知られる彼の親族、すなわち、父、兄弟たちは、彼を勘当しました。彼らにとって、彼はもはや存在しないのです。最初のうちこそ、彼はそれをまったく気にもかけていないように見えました。今の彼は年を取りました。金銭も足りているように見え、年金生活者として暮らし、妻に先立たれています。そんな今

正統主義を奉じるヌスバウムの一門は彼を破門した。それにもかかわらず、ヌスバウムは一人息子のヨーゼフ (Josef Nußbaum) を連れて周期的に帰省してくる。その目的は一門に復帰するだけでなく、保守的なユダヤ人に対して、リベラリズムを宣伝するためであった。昨年、ヌスバウムは市立劇場で自作の喜劇『時代遅れの律法 (‚Veraltete Gesetze‘) 』[25] を上演させた。今年の帰省の目的は、住民集会を開催し、その場で啓蒙主義について演説することである。

ヌスバウムはイレーネの従妹たちにとっての婿候補の一人である。従妹は彼の演説を理解するための知性をもちあわせてはいない。彼の演説に応じることができるのは、彼女たちのなかでは、イレーネのみであった。ヌスバウムはイレーネに好意を寄せ、従妹を通じて、彼女に近づこうとする。

『ユダヤの女たち』で記述される世界はきわめて閉鎖的であった。舞台がボヘミアの地方都市に置かれていただけでなく、登場人物の同質性も高かった。彼らのほぼ全員が中産階級に属し、19 世紀オーストリアの環境を共有していた。この狭い空間のなかで、17 歳のフーゴは 10 歳年上のヒロイン、イレーネと出会った。彼の恋敵として、裕福な年金生活者のヌスバウムが設定されていた。

シオニズムが本作を批判する理由を検討するにあたり、注目しておきたいのは、ヌスバウムの人物造形である。彼は地方都市の伝統社会に背を向けた、自由思想家であった。ヌスバウムを通じて、フーゴにはユダヤの同一性をめぐる議論へと導かれる可能性が出てきた。しかし、フーゴはヌスバウムによって喚起されるユダヤ人にとっての近代をめぐる議論には応じようとはしない。ユダヤの同一性をめぐる議論に対しては、フーゴはその傍観者のままにとどまっていた。

ヌスバウムに対照される人物がイレーネの弟のアルフレートである。彼は自由思想家に対して、ユダヤ系の強烈なドイツ民族主義者として描かれている。彼によって、ヌスバウムはテプリッツから放逐されることになる。アルフレートの人物造形は、『自衛』が本作に対して寄せた批判の理由を検討するにあたって、非常に重要であると考える。

4. シオニストの不在

『自衛』によれば、本作は「ユダヤの小説」として不十分であった。では、そのような評価の背景には、どのような事情があったのだろうか。ユダヤ民族主義による本作に対する否定的評価の理由として、筆者は以下のような仮説を立てた。

『ユダヤの女たち』には、ユダヤのナショナリズムを擁護する登場人物が登場しない。本作

になって、彼は再び、血縁者との結びつきを求めてきました。わたくしには分かりかねますが、何か恐ろしいことがあったにちがいありません。誰かが彼を追い出し、平手打ちを食らわしました。あなたもこうした古臭いイスラエル人をご存知でしょう。彼らは、息子が洗礼を受けたという知らせを聞くと、葬儀においてそうするように、衣服をずたずたに切り裂きます。つい先ごろ、ひどく高齢のラビが、ヌスバウム氏帰還の知らせを聞くと、窓から再び、身を投げたということです…

[25] Ebd., S. 60.

では、ドイツ人とチェコ人による民族運動のほか、ユダヤのそれについても言及される。『自衛』は、シオニズムの存在を指摘するだけでなく、その宣伝工作を実践する登場人物を期待していたのではないか。

住民集会の場面からは、シオニズムの運動家の不在が指摘されるだけでなく、ボヘミアの民族対立の所在が認められる。＜プラハのドイツ語文学＞作家ブロートは複数のナショナリズムの衝突を通じて、関心の行方を開拓していったと考えられる。それゆえに、本節では、住民集会を詳しく取り上げてみたい。

ヌスバウムは住民集会を企画した。彼自身はその場で「民族・宗派上の忍耐強さ („Nationale und konfessionelle Duldsamkeit“) 」について語り、ロシア人のピトロフは「ロシアのユダヤ人迫害 („Die Judenverfolgungen in Rußland“) 」[26] について報告した。集会の際、イレーネの弟アルフレートはピトロフの講演を妨害した。ヌスバウムは集会失敗の責任を問われ、テプリッツを追われる。フーゴにとって彼の失踪は、恋敵に対する小さな報復の意義があった。アルフレートはフーゴの恋敵を追放した。この行為を通じて、アルフレートは主人公の味方になっている。

先に述べたように、アルフレートは強烈なドイツ民族主義者であった。彼はユダヤ人であるにもかかわらず、出自には無関心であるだけでなく、それを蔑視している。ナショナリズムの実践家としての彼の属性記述は非常に興味深い。彼は特段音楽には興味をもっていないにもかかわらず、ワーグナー主義者で、歌詞とその主題に精通している。他人が運動家としての属性を識別できるように、彼は「ドーナルの叫び (Donars Ruf) 」や「ジークフリートの角笛 (das Siegfriedshorn) 」[27] を口笛で吹く。

> Alfred gehörte zu jenen jungen Juden, die eine starke Hinneigung zum Arischen haben und alles Jüdische verächtlich finden, bei denen dies jedoch keine Fexerei, sondern eine durch ihre übrigen Neigungen bekräftigte Anlage zu sein scheint. Er war Turner, Erstchargierter einer liberalen Verbindung, als deren bester Fechter er galt. Er betrank sich bei allen bedeutenderen Anlässen, liebte Prügeleien mit Tschechen, derbe Witze, Anstände mit der Polizei. Seine Autorität in der Couleuerpolitik war anerkannt.[28]

ブロートは二重帝国期におけるドイツ民族主義の実践形態を克明に記述している。ボヘミアでは、ドイツ人とチェコ人による民族対立が先鋭化していた。それを調停するため、議会には、両民族が別々に代表者を選出する民族別議席制が導入された。アルフレートはドイツ人の利益

---

[26] Ebd., S. 238.
[27] Ebd., S. 231.
[28] Ebd., S. 228f. アルフレートは例の若きユダヤ人たちのうちの一人である。彼らはアーリア的なものに強く惹かれ、ユダヤ的なもののことごとくを蔑んでいる。彼らのこうした傾向は決して特殊な愛好癖ではなく、彼らの好みによって補強された資質のように思われる。彼は体操選手であり、リベラルな協会の議長であった。彼は協会所属の最良の剣士としても知られていた。彼は機会を見つくろっては酩酊し、チェコ人との殴り合い、下品な冗談、警察との悶着を楽しんだ。学生組合による政治活動において彼の権威は認められていた。

代表者になることを望んでいるが、出自の理由から、それは難しい。それでも彼は教職を志望し、ドイツ人にとっての利益を確保するために奔走していた。

> Sein Plan war, Mittelschulprofessor zu werden und dann in die vaterländische Politik einzugreifen, aber ganz anders, als man bisher gewohnt war. Der Zusammenschluß aller Deutschen war sein Ideal, staunenswerte Dinge wären da zu vollbringen. Er würde vielleicht nicht gerade Abgeordneter werden, das sei zu schwer für einen Juden, aber jedenfalls nationaler Vertrauensmann, mit Kleinarbeit sei gerade das meiste zu leisten. Er fand auch in Teplitz bald Anschluß an einen Turnverein, der einer ähnlichen Parteischattierung angehörte. Er hatte Empfehlungen von führenden Volksmännern, korrespondierte mit Organisatoren, wobei er nie vergaß, die Marken des deutschen Volksrats auf den Kuverts anzubringen. Sein Kopf war voll von Zeitungsmeldungen, Wahlresultaten, Ehrenbürgerernennungen, Grundbesitzkäufen, Beamtenanstellungen. Und in all dem zeige er eine Strebsamkeit, ein Feuer, das ihn doch deutlich wieder in seine Rasse wies, gerade dann, wenn er sich ihr am weitesten entfernt glaubte.[29]

アルフレートはドイツ人を中流階級と庶民に分類した。市民階級に属するドイツ人はユダヤ系が多い。下の引用からは、すでにシオニズムがドイツ系中流階級のあいだに、ある程度普及していることが読み取れる。彼は教養市民層をシオニズムに近いという理由から「汚染されている (verseucht) 」[30] と非難し、庶民と交際することを好む。庶民にドイツ人らしさを求めようとする民族主義者の姿勢からは、ロマン主義の影響が認められる。

> Aufrichtig freute er sich, in Teplitz zu sein, in einer deutschen Stadt, statt in dem „tschechutzischen" Prag. Nur daß es hier so viele Zionisten gab, kränkte ihn. Den Mittelstand nannte er daher „verseucht", er redete lieber Arbeiter und kleine Händler an: „Endlich kann man doch wieder mal ohne Angst deutsch reden, mit dem Volk", und er war über den Dialekt entzückt: „Wie roh das Tschechische dagegen klingt, so gemein, so ordinär." Alles was slawisch war, umfaßte er mit einem großen ehrlichen Haß...[31]

---

[29] Ebd., S. 229f. 彼の計画は、中等学校の教授になり、祖国の政治に介入することだった。しかし、それはこれまでになじみのある政治とはいっぷう異なるものだった。彼の理想は、あらゆるドイツ人の合同である。実現するなら、それは驚くべき偉業であろう。彼は代議士になりたいのではないかと思われるが、ユダヤ人にはその途は難しかろう。しかし、民族利益の代表者になり、小さな仕事をこなすことについては、たいていのことが実践可能であるにちがいない。彼はテプリッツに到着するとただちに、類似の政治的色彩のある体操協会と接触した。彼は有力者からの推薦状をもらい、諸機関と文通した。その際、彼は封筒にドイツ民族評議会の印をつけることを、決して怠らなかった。彼の頭は、新聞報道、選挙結果、名誉市民任命、土地購入、官吏任用のことでいっぱいだった。これらすべての行為から彼の勤勉さが透けて見えた。明らかに、この炎が彼を再び、彼自身の種族へと立ち返らせた。それが起きたのは、ちょうど、彼が彼自身の種族からこれ以上ないほどに遠ざかっていると信じていたときだった。

[30] Ebd., S. 231.

[31] Ebd. 彼は「チェコ人の」プラハではなく、ドイツ人の都市テプリッツに滞在していることを、心から喜んだ。ただこの地にあまりにたくさんのシオニストがいることだけが、彼の感情を害した。

フーゴはアルフレートに改宗の可能性を問う。それに対するアルフレートの答えは、非常に近代的である。彼は宗教的帰属と民族的なそれを明確に区別した。彼にとって、出自を否定することは、自尊心を自ら進んで傷つけることと同義である。下の引用からは、ユダヤ系のドイツ民族主義者ならではの志向が認められる。ユダヤ人は自らの同一性に対する矜持をもつことによってようやく、ドイツ人に隣人として認められる。

„Werden Sie sich taufen lassen?“ fragte Hugo interessiert, „da es für einen Juden so schwer ist, wie Sie sagen...“
Alfred hatte die Antwort bereit: „Es wäre feig und deshalb tu ich es nicht. Im übrigen würde mir natürlich gar nichts daran liegen. Ich bin vorurteilsfrei... Höchstens wegen der Eltern...“[32]

アルフレートの口から住民集会開催の目的が語られる。ヌスバウムはウィーンの選挙区で、パウル・ホック (Paul Hock) の政党から代議士に立候補をするつもりでいる。そのためには地方における活動履歴が必要であった。アルフレートは集会に対するヌスバウムの真意を明かしたのち、彼とピトロフの欠点を挙げている。彼ら自由主義者は出自の喪失者である。故郷喪失者のイデオロギーはチェコ人に加担することを通じて、ドイツ人に損害を与える。

die zwei sind Freidenker, beide antinational... Was für ein Skandal, bedenken Sie es doch nur... in Teplitz, in einer deutschen Stadt läßt er einen Slawen sprechen, öffentlich, ich bitte... Wenn ein Reichsdeutscher in Tabor oder in Jicin reden wollte, was würde man dort machen. In Stücke würde er zerissen, was? Aber wir, wir sind lau, wir lassen uns alles gefallen...Na, es soll ihnen noch versalzen werden...“[33]

アルフレートは住民集会を妨害した。その目的は、自由主義者によるチェコ人に対する寛容

それゆえに、彼は中流階級を「汚染されている」と名指しした。彼は労働者と零細商人に話しかけることを好んだ。「庶民とならようやく、一抹の不安もなく、ドイツ語を話せる」彼は方言に心を動かされた。「それに対して、チェコ語の響きのなんと粗野なことだろう、なんと卑劣に、なんと卑俗に響くことだろう」スラヴ的なもののすべてを、彼は大っぴらに明けすけのない憎悪でまとめた。

[32] Ebd., S. 232. 「洗礼を受ける気はないの？」と、フーゴは興に乗って尋ねた。「君が言うように、ユダヤ人にとって状況は厳しいから…」
アルフレートは答えを準備していた。「洗礼は臆病の証だろう。だからおれは洗礼を受けようとは思わない。それはそうとして、洗礼がおれにとっての大事じゃないことは、言うまでもないことさ。おれは偏見にはとらわれていないぜ。せいぜい両親のおかげかもな」

[33] Ebd., S. 252. こいつら二人は自由思想家で、そろって反民族主義派だ…考えてもみてくれよ、これ以上の醜聞があるかい…このテプリッツで、ドイツ人の都市のテプリッツで、彼 (=ヌスバウム) は、スラヴ人を公衆の面前に登壇させようとしている…ドイツ帝国のドイツ人がターボルやイチーンで講演をしようなら、どんな騒動になるか。そいつは八つ裂きにされるに決まってる。おれたちは生ぬるい。おれたちはすべてにおいて甘すぎる。やつらの計画をぶっ潰してやる…」 (括弧) 内筆者加筆。

政策の宣伝を阻止するためであった。一方で、彼の真意は、政治とは無関係の外国人憎悪にあった。彼の従妹のカミラはピトロフと婚約しようとしている。彼はスラヴ人を身内として受け入れることができない。彼のスラヴ人憎悪は女性蔑視の一面を垣間見せる。

„Was. Sie wissen also noch gar nicht, daß sich meine Cousine Kamilla morgen abend mit Pitroff verloben soll? Sie wissen nicht?...Mit Pauken und Trompeten... Aber das muß verhindert werden, ich mache ihm heute einen Tanz,wenn's gelingt..."
Hugo begann zu verstehen. Also durch die politische Gegnerschaft blickte eine Liebe durch...
Alfred aber kam ihm zuvor: „Glauben Sie nicht, daß es wegen des Mädchens ist. Ein Mädel, ich bitt' Sie, ein Stück Fleisch mit Augen... Sie tut mir nur leid. Da soll sie diesen wildfremden Menschen nehmen, einen angeblichen Freund des angeblichen gut bekannten Herrn Nußbaum... Diesen jüdischen Familien ist doch jeder Bräutigam recht. Man hat sich erkundigt, gut. Moneten hat er, irgendeine Zwirnfabrik in Petersburg. Und da soll das Mädel, einfach mir nichts, dir nichts, über die Grenze geschafft werden..."
„Sie will nicht?..."
„Was liegt diesen Leuten daran", flehte Alfred, aufs höchste gereizt. „Ein Deutscher, ein Slawe, alles Wurscht! Keinen Funken Ehrgefühl haben sie im Leib... Ein Russe, ein Barbar... Alle Slawen sind falsch."[34]

ピトロフのたどたどしいドイツ語での演説が始まる。アルフレートの仲間の学生組合員がホールに到着すると、彼はフーゴにこう語りかけた。

„Aha, da sind sie schon", rief Alfred.
In der Türe zeigte sich eine Anzahl gleichgekleideter junger Leute, alle in Touristenhemden, grüne Jägerhütchen auf dem Kopf.

---

[34] Ebd., S. 253f. 「何を言っているんだ。おれの従妹のカミラが明日の晩ピトロフと婚約するということを、君はまったく知らないと？ほんとうに知らないと？…それも鳴り物入りで…しかし、婚約なんてさせやしないさ。あわよくば、やつに喧嘩をふっかけてやる…」
フーゴにはようやく事情が明らかになってきた。政治的敵対関係から愛がその姿をのぞかせている…
アルフレートはフーゴの機先を制した。「若い女のための出入りだなんて思わないでくれ。ひどいことを言っているのかもしれんが、若い女など眼のついた肉の塊にすぎん…彼女は確かに憐れだ。彼女は、この赤の他人を、それも自称有名人ヌスバウム氏の、しかもその自称友人を婿に迎えるというのだからな…こんなユダヤの一族なら、どんな婿でも歓迎するさ。すでに照会済みだというが、彼には銭があるらしい、ペテルブルクに繊維工場とやらまであるらしい。おれにとっても、君にとっても大した意味のない若い女が、国境を越えて行く…」
「君は婚約に賛成しないの？」
「こいつらにとって」アルフレートはひどくいらいらしながら懇願するように言った。「ドイツ人でも、スラヴ人でも、どうでもよいのさ。こいつらの身体には、自尊心のかけらもないのさ。ロシア人、野蛮人め、あらゆるスラヴ人は誤っている」

„Wer?“

„Der Turnverein Wotan, － meine Freunde.“

Die Neuangekommenen drängten in den Saal und stellten sich längs der Hinterwand auf. Plötzlich rief einer von ihnen laut: „Kellner, ein Bier...“[35]

警備員が闖入者を取り押さえにかかる。壇上のピトロフは演説を再開しようとした。その瞬間、アルフレートは高らかに勝利を宣言する。

In diesem Moment beugte sich Alfred Popper weit vor, hing förmlich über dem benachbarten Tisch, eine Hand stützte er auf den Sessel, eine an die nächste Säule, so daß er sich hoch emporhob und von hier aus, die Augen weit offen, ließ er einen schrillen Pfiff ertönen. Er schwenkte den Hut und rief, sich fallen lassend: „Abzug!“

Dies war das Signal. Sofort stimmten die Turner ein: „Abzug, Abzug Pitroff“ und drängten in einem Keil gegen die Tribüne vor. Der Ordner wurde zu Boden geworfen. Gläser klirrten.[36]

アルフレートが集会の中止を宣言すると、聴衆と闖入者による乱闘が始まる。警察長官が解散を命じると、聴衆はホールから退出し始めた。アルフレートは大声をあげて、ヌスバウムとピトロフを罵倒している。その周囲には人垣ができていた。ヌスバウムに同伴していたイレーネはその中心にいる。フーゴはイレーネを解放しなければならないという義務感にかられ、人々の輪のなかに入っていった。背の高い二人の男ヌスバウムとタウベリスに守られた彼女は、フーゴを黙殺した。このイレーネによる侮辱に対する癒しを、フーゴはオルガに求めることになる。住民集会の顛末は以上である。

ユダヤの民族主義は本作を評価するにあたり、「ユダヤの小説」としては不十分であるという理由を挙げていた。筆者はこの背後にある事情として、本作にはシオニズムの実践家が登場しないという事実を挙げた。これは主人公、ヌスバウム、アルフレートからなる三人の男性登

---

35 Ebd., S. 254. 「そら、やつらが到着したぜ」とアルフレートが叫んだ。
扉の前には、同じ服装をした数人の若者が姿を現した。全員がシャツ姿で、頭には緑のフェルト帽を被っている。
「だれ？」
「体操協会ヴォータン、――おれの友人たちさ」
闖入者は広間に突き進んでいって、奥の壁に沿って立った。突然、そのなかの一人が大声をあげて、「給仕、ビールだ」と叫んだ。

36 Ebd., S. 255. この瞬間、アルフレート・ポッパーは大きく前屈みになって、儀式ばった体で、間近にあるテーブルの上でその身を乗り出した。彼は一方の手を間近にある椅子の背に、もう一方を間近の柱に当てがった。彼は体を高く伸ばし、ここから眼を大きく見開いて、けたたましく口笛を鳴り響かせた。彼は帽子を振って、倒れ込みながら、「退却」と叫んだ。
これがそのサインだった。ただちに体操選手たちが唱和した。「ピトロフ退却、退却」彼らは楔形の隊列を組んで、演壇に向かっていった。警備係は投げ倒された。グラスがカチャカチャと音を立てた。

場人物を通じて導き出される。

政治問題に対して、フーゴは内気な観察者のままにとどまっていた。ヌスバウムは伝統的なユダヤ主義からは一線を画していた。ドイツ民族主義者のアルフレートはヌスバウムを、彼のイデオロギーにとっての破壊者としてとらえていた。アルフレートにとってユダヤの話題は彼の出自以上の意味をもつことはなかった。

フーゴはイレーネ、ヌスバウムとの出会いを通じて、ユダヤの同一性をめぐる問題には確かに接触する。しかし、彼はそれに深く関わろうとはしない。フーゴにとってヌスバウムは恋敵であった。アルフレートはヌスバウムを失脚させる。敵の敵は味方であるという原則にしたがい、フーゴはドイツ民族主義に友好的な態度で接した。

本作を通じて、ユダヤのナショナリズムの存在は確かに言及されていた。それにもかかわらず、主人公はそれに関与しようとしなかった。主人公は恋愛をきっかけに、むしろドイツの民族主義に近づいていった。

本作は、ほぼユダヤ人からなる世界を描くことを通じて、ユダヤの同一性をめぐる問題の存在を指摘した。しかし、本作はその方向性を示唆するにはいたっていない。

5. おわりに

『ユダヤの女たち』の出版直後、ユダヤのジャーナリズムはただちに本作に注目した。その書評によれば、本作は「ユダヤの小説」になりうる可能性はあるが、現状ではそうなりえていない。本稿では、本作が、ユダヤのナショナリズムが望む通りの小説になりえてない理由を検討した。考察結果は、主に二点に要約される。①本作において記述される世界は、きわめて限定されていた。そこでは、19 世紀オーストリア文化の価値観に染まったユダヤ人しか登場しなかった。自由思想家を通じて、伝統と近代の対立は示唆されるが、近代の存在はほのめかされるにとどまった。②民族対立の描写を通じて、ドイツ、チェコ、ユダヤのナショナリズムの言及はある。主人公はそのなかを右往左往していた。最終的に、彼はドイツ民族主義者に影響される。本作が「ユダヤの小説」になりえていない理由としては、主人公がドイツのナショナリズムとは訣別し、ユダヤのそれへの道のりを開削しようとしなかったことにあると考えられる。

本稿では、ナショナリズムの観点から本作に注目した。民族問題に対して発言する人物は主として男性登場人物であった。そのため、表題が『ユダヤの女たち』であるにもかかわらず、主要女性人物イレーネやオルガ、フーゴの母ルーツィエ夫人にはあまり言及できていない。ブロートは本作発表当時、ユダヤの同一性が投げかける問題をどう引き受けようとしていたのだろうか。女性登場人物を考慮したうえで、この問いを解明することが、筆者にとっての今後の展望として挙げられる。

(北海道大学　文学研究院・専門研究員)